

## 実施報告

### 序章 林場会場

- ・江戸木挽き「林組」 林 以一 氏  
高価で貴重なために機械製材できない銘木を大鋸一本で引く木挽きの技。  
屋久杉の大径木を大鋸一本で挽き、伝統の技にて切り出された美しい木目の断面を披露。
- ・日本各地の製材所ブースによる地域材の紹介
- ・東京中央木材市場所属問屋による全国優良材の展示紹介

### 第1部 講演会会場

#### ●基調講演1：藤本 昌也 氏 (社)全日本建築士会連合会 会長

演題：「環境時代の木造住宅を考える」～地産地消の家づくりに向けて～

概要：設計士の立場で、品格ある普通の木造住宅を造るために今、考えなければならないことはなにか。

- ・川上側の問題（質・量・価格の不安定）と川下側の問題（細かい骨組み・金物の多用・大壁構造の採用・大工・設計士の技術の低下、外材依存・内地材の無視）を提示。
- ・自身の経験を元に、「民家型構法」の提案、林野庁のモデル住宅「国産材ハウス」の建設などを通し、自治体や地域連携に向けて川上側との一体化の試みを紹介。
- ・国産材活用を前提とした木造供給システム普及への3つの条件①川上、川下の地域連携 ②川上、川下の相互理解 ③設計者、施行者の資質向上に向けての積極的姿勢をあげる。
- ・地域に根ざした国産材の家づくりやコミュニティー施設づくりなど新たな工法の提案を含め、様々な実践の場を広げていく。

#### ●基調講演2：青木 宏之 氏 (社)全国中小建築工事業団体連合会 会長／工務店サポートセンター 理事長

演題：「工務店の土俵で、地域材を活用した長期優良住宅を」

概要：量より質の時代へと移り、ストック重視の住宅の長寿命化が推進される。

- ・今後は住居費負担の軽減にともなう住宅の長寿命化とともに、住宅履歴情報（いえかるて）による維持管理（メンテナンス・増改築など）という役割を工務店が担うこととなる。
- ・新築は国産材主体の長期優良住宅をとることが予想され、日本の森林資源の備蓄が増加している現在、国産材の利用拡大には、寸法・乾燥・強度など、使う側の立場になって供給されることが望まれる。
- ・100年以上の長い視点で日本の家を造り守るために、国の助成など様々な仕組み作り、工務店の技術力向上、技能者(職人)の養成、工務店・設計士・プレカット・産地製材所が協力し合うことが求められる。

#### ●一般消費者に対する国産材 PR サイト「日本の木のいえ情報ナビ」のご紹介

林野庁 林政部 木材産業課 課長補佐 木下 仁 氏

- ・国産材の多くが、現在伐採期を迎えていることから、森林・林業の役割と木材活用の意義を説明。
- ・このサイトがオープンして、約1年が経ち、既に1000件を超える国産材を活用する地域に根ざした工務店、建築士事務所を中心に登録している。
- ・情報ナビでは、様々な「お役立ちコンテンツ」の充実を図り、「地域の助成制度」「有利な金融商品」「各地の取組」など、様々な角度から国産材を使って貰える環境作りを実行している。
- ・本日出席されている方々もこのサイトの活用をお勧めしたい。
- ・今、国会にて国産材活用の推進を公共団体が率先して実行していく為に、「公共建築物等における木材利用促進法案」の国土交通省と合同での成立を目指している。

## 第2部 林場会場

### ●各産地製材所紹介

岩手県：いわてブランド材 梅垣 氏

岩手県全体の流れとして、唐松の集成材が人気となり丸太が高騰しています。

また、杉・桧が伸び悩む中でも、長期優良住宅に取り組む工務店と直接連携をとり、杉・桧など国産材を活かした住宅作りを進めておりコツコツ努力することが、数年先に結果として現れてくると考えています。

和歌山県：紀州木材緑友会 会長 富田 氏

紀州が誇る杉・桧は目合がよく色艶や強度・耐久性にすぐれた良材です。

紀州木材緑友会では昨年からはB級品である食痕材をアカネブランドとしてパンフレットを作成し、紹介しています。強度の実験データから問題なく使えることを実証し、資源の有効利用とコストダウンを兼ね備えた天然木として利用促進を図っています。

千葉県：LLPグループ「木と土の家」会長 石井 氏

山武杉は大きな産地というよりも、地域に限定され材ですが、昔から建具材や戦前戦後の木造船として利用されてきました。

特徴は芯が固く、油分を多く含み、褐色の特徴のある色合いをもち、知る人ぞ知る材と自負しております。

地産地消の考えのもと、地域で住宅や公共の建築物にと積極的に活動しております。

奈良県：吉野桜井木材成年クラブ 会長 松原 氏

吉野材は歴史と伝統があり強度・耐久性にすぐれ、植林によりエコであり美しさと癒しをもたらす木材です。

私どもの会はそれぞれ専門的な技量を活かし柱材・板材・長尺材各種を山や製材所などとの強い連携により、製品の作成に力を入れています。

木を使うことで環境や地域経済へのどのように良い影響をあたえるかなどを検証しPRしております。

また、山からの切り出し、製材までを見て知っていただくための、奈良県林業製材見学ツアーを企画しています。

### ●パネルディスカッション「住宅の中で無垢の国産材を主役にするには」 市場林場内会場にて

パネラー 藤本 昌也 氏 (前出：㈱現代計画研究所 代表取締役会長)

青木 宏之 氏 (前出：㈱青木工務店 取締役会長)

司会進行 吉畑 光二 氏 (住まいる CHANCE ネットワーク事務局 推進委員長)

産地製材所より 奈良県 川上さぷり (川上産吉野材販売促進協同組合) 南本氏

和歌山県 ㈱山長商店 榎本氏

概要：

司) まず初めに、今回のディスカッションは通常の会場とは違い、材木が並ぶ林場で実際に木材を目にしながら行うという、木材市場ならではの新しい試みということをお伝えしたい。

司) 木材建築設計に携わる上で実際に木材の知識はどれくらい必要だと考えますか。

藤) 設計士は図面を書くが、木材の継ぎ手・仕口までをどこまで理解して木拾表や伏図といった計図を作れるか、設計士の能力が今後課題である。

青) 工務店の中でも多くは、プレカットされた部材しか見たことがないなど木に触れる機会が極端に少ない。今回の開催地である市場には多くの無垢材と専門知識が豊富な問屋がいるのだから、どんどん交流をもつべきである。

また、国産材を主役にする為には、データが揃っている外材が使いやすい為、そうしたデータ作りを怠ってきたこれまでの木材供給側にも反省すべきことあるのではないか。

司) 「民家型構法」など伝統的な構法を行う為に、工務店への国の支援などどのようにお考えでしょう。

青) 伝統構法というと文化財、社寺仏閣などを思い浮かべるが、本来木造住宅もそうした構法でつくられてきた。現在一般的な住宅では木材の占める割合は坪あたり 0.3 m<sup>3</sup>程度であるが、長期優良住宅先導モデルではオール国産材を使用し坪あたり 1 m<sup>3</sup>を越える。

伝統的な構法による建築はさらに木材の利用が増え、なかでも板壁工法（さぐり壁工法）では坪あたり 3 m<sup>3</sup>を超える。

伝統的な構法が建築確認や保険、長期優良住宅の認定を得られるような法整備に着手していく。

このような建築に対応できる工務店、プレカット工場は限定されるが、棟数は限られても木材をふんだんに使うことで、大手住宅メーカーと逆行した、あらたな我々の土俵となるであろう。

司) 伝統的な構法を用いながらもデザイン性を取り入れ、大手との差別化をはかる上にも木材の知識が必要となるのでは。

藤) ユーザーが望んでいるのは本当に低コストであるのか、そこに作り手の先頭にたつ設計士の説明責任があるのではないか。地域（国産）材を使う意味とは、伝統的な構法による仕口や継ぎ手の強度など知識を得て、木造住宅を広げていくために、設計と大工、山や材木屋との連携により、ユーザーという最後のハードルを越えなければならない。

司) 木材という自然素材に付き物であるクレームですが、どのように対応したらよいでしょうか。

青) 集成材の割れに対してのクレームでお客様を説得する自信はないが、無垢の杉や桧の材に関しては自信と実績がある。ただし、当事者として真剣に向き合うことが必要である。

クレームに対して、プレカット工場などの営業に任せるのではなく、設計者・施工者の説明でなければならない。そのために割れの問題など、研究者が多い中検証データなどを作成し、国からのお墨付きをいただくなど、解決しなければならない問題が多い。フォーラムでも今後の対応を検討したい。

司) 木材の割れに関しては、乾燥の問題を抜きには語れないが、産地製材所の考えを伺いたい。

川上サプリ) ニーズに対応すべく、柱材（杉の芯持材）など表面の割れ対策の為 10 年程前より高温乾燥を採用している。高温乾燥では表面の割れが押さえられても中が割れる場合がある。今後の技術の研究とあわせて、ニーズにあった乾燥で対応していく。

司) 売れる商品として高温乾燥材を開発したわけですが、割れに関して設計の立場からはどうでしょう。

藤) 乾燥については何が正しいのか情報は錯綜している現状がある。高温乾燥はダメだという声もある。構造物に関しては高温乾燥材を避けている。もっと客観的な実証データを川上側へ求めたい。

山長商店) 乾燥に関しては、日進月歩である。1年ごとに新しいテクノロジーにより開発が進んでいる。

また、同じ乾燥機であっても製材所のノウハウで材料に違いがある。

含水率、仕上げはもちろんのこと、内部割れは温度帯と時間の調整で軽減が可能である。

天然乾燥と人工乾燥双方メリットデメリットがあり、万能な乾燥方法はない。

それぞれの製材所の事業規模と、つきあう工務店の規模や建築の方向性によって製材所は方向性を決めていったといえる。

(山長商店 自社の例をあげながら)

設計・工務店・供給者・施主でのコンセンサスがとれれば方法なんでもよいのではないかと。

コンセンサスをとりやすくするためにも、供給側が自信を持って進める材を、使い手側が納得の行くまで話し合い、より良い回答を得ることが重要である。

司) 国産材が後ずさりしないためにも、JBN国産材利用拡大委員会にみられるように建てる側と供給側がひとつになることが求められるのでは。

青) 先導モデルを立ち上げるにあたって、100%国産材に供給の不安の声があがったが、私はこの市場の存在を知っていたので全く不安はなかった。

工務店の求める使いやすい材を供給できる体制づくりとして、材木屋と工務店が新しい連携をとることが大事である。このことから国産材利用拡大委員会が発足した。さらに設計士との連携をとるために情報の開示の流れはできている。

司) 設計士の考える工務店の資質とは、また選定方法は？

藤) むしろ設計士の資質がいま問われているのではないかと考える。

木材(木造住宅)についての資質向上を真剣に謙虚に研究していかなければならない。

工務店では青木会長のおっしゃるように大工さんの人材育成に取り組んでいる。

こうして努力した設計士と工務店が連携をもつことで、今後の木造住宅の未来がひらけるのではないかと。

司) ありがとうございます。今後の木造住宅は、先生が言われるように「建物に木が使われる」のではなく「木材により建物を建てる」という事から、川上から川下まで今まで以上に真剣に「木材の知識の向上」が必要になります。

特に川上側の出荷の姿勢等も含め川下までの一体化による お施主様に対して更なる情報の提供が必要という事ですね。

国産材を主役にする為の貴重なご意見ありがとうございました。